GENTS　THE　WORLD

伝書鳩リネロサーズデイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＧＥＮＴＳ　ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ

【Ｎコード】
Ｎ８６４２Ｙ

【作者名】
伝書鳩リネロサーズディ

【あらすじ】
三年前、世界全体で発生した謎の地震により決して交わることのない別次元の世界、こちらの世界と全く同じ大陸の南極大陸をのぞく五大陸が、この世界の海にパズルのように組み合わさり突如現れた。
今だ混乱する世界の中で、悲愴皆無（ひそうかいむ）…名前通りの人の域をはるかに超えた不幸な高校生
は毎日悲しい日常を送っていた。
そんなある日、悲愴のクラスに別次元から来た？という転校生、カ

ンタレラ・リネシエロ　右目には眼帯そして背中には太刀を背負った不審者ならぬ殺し屋？と不幸にも友達になってしまう。
そしてその日の帰り道、一人で歩いていた悲愴に驚きの言葉を告げられる。
「悲愴皆無、今日からお前は魔界帝国二代目の魔王だ！！」
その日をさかいに悲愴の悲しすぎる日常は一変する…そう、まさか俺がこの世界の救世主になるなんてこの時の俺は想像もしていなかった。

プロローグ　はじまり（前書き）

初投稿させてもらう伝書鳩リネロサーズデイです。
この小説はスパロボのようにいろいろなアニメが参戦してくるんで
興味のある方はぜひ読んでください。

プロローグ　はじまり

「俺は夢の国の住人さ。」
中学生時代友人に言った半分本気のそのセリフで冷たい目で見られたその夜、俺は頭を抱えて後悔した思い出がある。
幼いころから両親に捨てられ、叔父と叔母に育ててもらった俺、悲愴皆無は現在安いボロアパートで高校に通いながらバイトをする毎日で何とか生きながらえている。
これ以上叔父と叔母に迷惑をかけないようにと思って始めた一人暮らし…それがありきたりな一人暮らしを始める理由、だが、俺みたいに一人暮らしをしているという高校生は現在９０万人を超えたというニュースを耳にしたことがある。
それはすべて3年前の世界全体で起きた地震…今では次元連結震と呼ばれているあの地震によるもの、２０１２年６月１１日に起きた次元連結震により太平洋に北極と南極を除いたこの世界にある大陸と全く同じ形をした決して交わることのない別次元の大陸が膨大なエネルギーによりパズルのように組み合わさり突出現した…それが次元連結震である。
その次の日に世界が動き突如出現した大陸に調査団を派遣しようとしたとき、その大陸から巨大な熱源反応が感知されその熱源がまっすぐ調査団のいたアメリカの本部に高速で移動し何の抵抗もできなかった本部は数秒もせずに全滅した。
付近の監視カメラには空を駆ける２０メートルはあるだろうと思われる巨大な白い人型ロボットが一機映っていて、あの大陸の文明の高さが明らかとなると同時にこの世界のものではない、別の世界から来たつまり…別次元の世界なのではないかという推測がわずか地震発生から二日後にでてきた。
その後も、たった一機のそのロボットにアメリカ以外の世界各国に被害をもたらしたそのロボットは日本で放送されたロボットアニメ

初期のガンダムにとても似ていたことから人々はそのロボットを白い悪魔…ガンダムと呼ばれるようになった。
このままではまずいと感じた世界政府は世界のすべての最先端の科学とたくさんの人間を使い、対ガンダム用ロボットＡＴ（アーマードドルーパー）直立一人乗り戦車のスコープドッグを開発した。
この名前は開発最大責任者の日本人が好きな装甲騎兵ボトムズからそのままとったものだといわれその形式や武器のすべてまでもがアニメのスコープドックと全く同じで区別がつかないといわれるほどだった。
２０１２年８月１２日…ガンダムが現れてちょうど２カ月が経過したその日、中国に向かうと思われる途中の通過地点日本の東京都で５機のＡＴが世界で初めて使用され、計算しつくした行動パターンそして５機の見事な連携攻撃によりガンダムの約四分の一の４メートルの大きさしかなかったものの見事に勝利した。
誰もが歓喜の声を上げる中で惨劇は起こった。
ボロボロになり穴だらけになったガンダムから突如激しい光が発生し日本全体を覆ったあとガンダムは完全に活動を停止する。
最後の無駄な足掻きだと思われた行動だったが、その光を浴びた１８歳以上の大人たちが次々と苦しみだし死んでいき、その日の間に人口は激減さらにそのうちの１８歳以上の大人はわずか３％残り９７％がすべて１８歳以下の子供となり、日本は絶望的な状況に陥った。
そして様々な国からの支援で１８歳以上の大人が除所に増え始めているものの、人口は今だ１０００万人を超えず、１８歳以下の子供は９０％　１８歳以上の大人は１０％と今だ絶望的な状況なのである。
だが悪いことばかりではなく、あのガンダムを倒したあの日から今だ出現した大陸の動きはなくなったが、今だ油断を一切許されない状況だがそれによりＡＴの量産＋開発が進み今ではどの国でも１００機を超すＡＴを所持していていつガンダムが現れても問題はない

といわれている。
こうして今は再び人類は平和を取り戻した…だが、突如現れた大陸の詳細は分かっていない。
宇宙人が攻めてきた、神が天罰を下したなど、いろいろと説はあるが一番有効とされる説は突如発生した膨大なエネルギーにより、別次元の世界と一時的に連結し別次元の大陸がこの世界に吸い寄せられた…という考え方が代表的になり次元連結震という名前がついた。
でもそれはあくまでも考えであり、本当のことは誰ももわかっておらず調査したくても、未知数の力を持つあの大陸に近づこうとするやつは誰一人としていないだろう。
誰も知らない真実…今思うと俺は…いや人類みんな文字通り夢の国の住民だったのかもしれない…そう思うとなぜか嬉しくてたまらない、それならこんな悲しい俺でもかっこいいヒーローになれるかも知れないからだ…
そして、悪夢は再び人類に降りかかる。そして俺の人生は全く別の未来に進みはじめてゆく…これは、名前通りの悲しすぎる高校生悲愴皆無の物語である。

プロローグ　はじまり（後書き）

説明長くてすいません…
よかったら感想をお願いします。

第一話　悲しい奴ほどよく…って言葉…ないですか？（前書き）

ついに記念すべき一話となりました。

読んでる人はたぶんいないと思うが…とりあえず書くんで物好きな人は読んでください。

第一話　悲しい奴ほどよく…って言葉…ないですか？

そこは、東京にある唯一の高校、白虹高校（びゃっこうこう）と呼ばれる高校…その高校でいつもの朝のホームルームが始まろうとしていたのだが、今日の朝はいつもと違っていた。

教師：「えっ～と、あいさつはいいのでそのまま聞いてくれ、今日のニュースみんな見たよな？」

男子生徒Ａ：「アカギが鷲巣編が終わっても続くってやつですか？」

教師：「うん、ちがうよ。」

男子生徒Ｂ：「じゃあ、あれですか？オリジンがアニメ化するってやつ。」

教師；「それも違うんですけど…」

男子生徒Ｃ：「分かった！！駒野がＰＫ外したことで総理は怒ってるんでしょ。」

教師：「そのニュースものすごく古いよね…せめて大津のダイビングヘッドを言ってあげたらいいんじゃ…ってちがう！！　あれだよ！！　あれ！！今朝全部のチャンネルで言ってたあの！！」

男子生徒Ａ・Ｂ・Ｃ：「「「天気予報か！！」」」

教師；「ハモって言うな！！お前ら絶対わざとだろ！！だいたいお

前たちはいつもいつも…」

男子生徒A：「総理、ドラえもんみたいな怒り方はいいので早く話を戻してください。」

教師：「……昨日の夜、前よりかなり規模が小さい次元連結震が東京で発生したってニュースだったんだが…男子生徒A…お前放課後、職員室な。」

おっと、うっかりこの教師の説明をしていなかった…この教師の名前は小泉連太郎（こいずにれんたろう）ついたあだ名は総理でこの学校で三人しかいない教師の一人で、のりがよく生徒にはそれなりの人気がある二年の担任である。

男子生徒A：「えええええ！！ちょっまっ…それだけは勘弁してくださいよ総理！！

小泉：「総理じゃなくて小泉先生だ。」

男子生徒C：「小泉総理、で、その次元なんたら震がどうかしたんですか？」

小泉：「おっと、そうだった話が違う方向に行く前に説明しないといかんな…男子生徒C、職員室行き確定な。」

総理が生徒に向き直り、ゆっくり話し始めた。

小泉：「三年前からあの大陸に動きはないが、やつらは必ずまた、なにかを仕掛けてくるはず…それは昨日起こった次元連結震もその始まりの合図じゃないとも言い切れないのも確かなのが今の現状だ。」

ざわざわと、クラスがざわめき近くの人とひそひそ話をしはじめる。

小泉：「はいはい、黙ってくださいね屑ども…」

一瞬で一切の話声がきこえなくなった。

小泉：「だが、この世界もなにもせずにそれを待っているわけではない、今では対ガンダム兵器のＡＴ（アーマドトルーパー）がどの国でも百体以上それを保持しスコープドッグを初めとするドッグ系、トータス系、マーティアル制ＡＴなどの開発もされ対策は万全というのも今の現状なんだか、それは日本を除いた国だけ…なのも事実だ。」

クラスのみんながそれまでとは違う深刻そうな顔を浮かべ下を向いていた。

理由は明白、ガンダムから発生した謎の光によりここにいる大半の生徒の親はみんな死ん

でしまい子供ばかりになってしまったこの日本にはＡＴ乗りがほとんどおらず１３０体ＡＴ

を保持している日本だが、そのうちの五体だけしか使われていない…その五体も三年前東

京でガンダムを撃破した五体でそのうちの４人のＡＴ乗りが光によ

って死亡、実際、日

本にいるＡＴ乗りはたった一人しかいないのだ。

小泉：「そこで、日本政府は対策として４７の都道府県一つ一つに必ず一校はある高校の中

から抽選で選びその選ばれた高校の授業はすべてＡＴ関連の授業となり、高校の全生徒を

ＡＴ乗りに育て上げるという制度がだされ、抽選によりひとつの高校の名前が読み上げられ

た…」

男子生徒Ｄ：「！！…それってまさか！！」

今までの話を聞き話の趣旨を理解した何人かが総理を見つめ立ち上がる。

小泉：「察しが早くて助かる…そう、選ばれたのはこの東京にある唯一の高校…　白虹高校（びゃっこうこうこう）だ…」

男子生徒Ａ：「…ふ…ふ…ふざけるなよ！！」

先ほどまでふざけていた男子生徒が声を荒げて立ち上がりその勢いで椅子が倒れた。

男子生徒Ａ：「なんで俺たちがガンダムを倒すためにＡＴ乗りにな

らなくちゃならないんだ！！」

女子生徒E：「そうよ！！自分たちの未来は自分で決める…なんで国に指図されなきゃいけないの！！」

男子生徒B：「もしかしたら死ぬかもしれない…俺はそんなことは死んでもごめんだね！！」

女子生徒B：「総理！！なにか言ってくださいよ！！」

男子生徒E：「そうだそうだ！！ちゃんと説明しろよ総理！！」

みんなの罵声が飛び交う…総理はただうつむくことしかできなかった…が…

？？？：「俺はやるぞ…」

その一言で教室は一瞬で沈黙しその声のあった方向を全員が見ていた。

？？？：「俺も運がいい、親が殺されても何もできなかった俺にあの大陸に復讐するチャンスがきたんだ…俺はやる！！誰がなにを言おうと俺はあの大陸にいる奴らを片っ端から殺してやるよ。」

その声はほんとにうれしそうで…そしてとても重い一言だった。

男子生徒A：「氷道…お前なに言って…」

男子生徒F：「俺もやる！！俺たちをもて遊んだあいつらに復讐するんだ…」

その話を聞いた生徒の一人が立ち上がる。

男子生徒G：「なら俺もやる。」

女子生徒F；「私もやるわ。」

一人また一人と次々と立ち上がり氷道という男子生徒に集まって行き、反対派の生徒と賛

成派の生徒が五分五分に分かれた。

男子生徒A：「お前ら分かってるのか！！AT乗りに命の保証なんてものはない…最悪死ぬかもしれないんだぞ！！」

対立する意見この状況があとどれくらい続くのか見えない未来はある人物によって終止符を打たれる。

???：「僕たちが何とかしなければ確実に世界は崩壊するのです…ふっふ…困ったものです。」

二年のクラスメイト全員：「ん？」

???：「その少女は、この世界を自分にとって面白くないものだと思い込んでいる…これはちょっとした恐怖ですよ。タンタンタンタンタンタンタン　タンタンタン　ドドドカッ

どこから…」

そこには机にうつ伏せになって寝ている男子生徒とその足元に落ちているまっがーれス、

○○○○ルが流れるｉＰｏｄがあった。

小泉：「…またお前か！！悲愴皆無！！」

悲愴：「ギャアアアアアアアアア…」

どなり声で飛び起き椅子ごと後ろに倒れ頭を強打する。

悲愴：「ウッギ！！あ～遺体…驚かせないで下さいよ総理！！」

小泉：「学校に不要物を持ってくるなと何度も言ってるだろ！！…ついでに遺体じゃなくて痛いだ…活字でしか分からないギャグをするな！！」

悲愴：「えっ、あっ！！…ごめんなさい…」

漢字の間違いに気付いた俺は素直に謝る。

悲愴：「で…なんの話をしてるんですかい？」

みんな：「……」

悲愴：「あれ？なんかやっちまたパターンのような…」

氷道：「いっけ～みんな！！やつを完膚なきまでにボコボコにしろ！！」

みんな：「了解！！」

悲愴：「やっぱ…ぐわああ！！」

クラスの全員とそして総理までもがどびかかりタコ殴りにされる悲愴皆無…こうして物語は始まった。

こんな言葉を聞いたことがあるだろうか、悲しい奴ほど稼ぎが少ない…無論そんな言葉などない…俺が即席で作った言葉である。

そう、それはそんな物語、何のとりえもない浅学非才…人並み外れた不幸な人間、主人公に全く向いていない悲愴皆無により生み出される全く新しい物語が…

第一話　悲しい奴ほどよく…って言葉…ないですか？（後書き）

書くのに多少時間はかかってしまいましたがなんとか書き終えることができました。

感想よろしく！！

第二話　転校生はクールでかっこいい？（前書き）

ついに二話目となりアクセス数も前よりは少し多くなった今日この頃…

はあ～…伝書鳩リネロサーズデイはこの頃絵が描けずため息をつくのであった。

わけのわからない前書き　完

第二話　転校生はクールでかっこいい？

突然で申し訳ないが…君は不幸な人間と聞いたら誰を思い出すだろうか？いろいろと思い浮かぶだろが、一番代表的な人物といえばとある魔術にでている上条当麻あたりだと思われるが…ここの一帯に住む人間はみんなこの俺、悲愴皆無だと即答するぐらい俺の悲しい人生が広まっている。

それは物心つかないころ両親に捨てられたときからはじまったその人生…それはあまりにも悲しいものだった。

代表的なのが、入学式集団感染事件である。

最初の不幸で、重い病気にかかり幼稚園に通えなかった俺は小学生になることはとても楽しみで、毎日わくわくしすぎて眠れないという状況が続いた。

そして待ちに待った入学式当日、不幸にも高熱が出てしまい入学式を休むと聞いた俺はおじいちゃんたちの反対を押し切って一人で入学式に参加した。

その後、急いで病院に連れて行かれ検査したところ、これまで見たこともない症例の超感染型新型のインフルエンザに罹っていることが発覚…そして翌日、入学式に参加したすべての人がそのインフルエンザに感染、全員が病院送りにされ二カ月以上入院し最高で一年以上も入院したやつもいたらしい…当然学校はしばらく閉鎖となり、学校に行けず悲しかった反面罪悪感を深く感じながら過ごした…これが入学式集団感染事件の全貌である。

そしてそれを境に俺の不幸は一気に加速した。

小学校は毎日歩いて登校するのだが、その時に必ず車か自転車にぶつけられ毎日のように救急車に運ばれるという日々が続き中学になるまで学校に行けた例（ためし）がない。

俺にとって通うのは学校ではなく病院というシステムがいつの間にか出来上がってしまったのだ。

そして中学に上がり始めて学校に通う喜びに浸っていたのだが、入学式は前のこともあるので参加できず、クラスからは入院生活の恨みにより人間サンドバックとなった俺は毎日半殺しにされながらもなんとか生きながらえていた。
さらに！！
氷道：「ながい！！」
その瞬間俺の横腹に氷道の両足が食い込みそのまま吹っ飛ぶ。
悲愴：「ぬがあああああ！！…いった～…なにすんだよ連麻！！」
なにもしてない俺にいきなりドロップキックをするやつを当然無視することなどできない。
氷道：「お前の紹介分が長すぎるから、ものすごく少ない読者のために強制終了させただけだ！！」
悲愴：「えっ？読者？なにそれ？もしかして食べれるの？」
なにを言ってるんだこいつは？
氷道：「…はあ～、お前のバカさ加減は見てあきれるぜ…」
こいつは氷道連麻（ひょうどうれんま）俺のたった一人の親友である。
悲愴：「なんだって、お前も成績はあまり良くないじゃないか！！」
氷道：「てめえ！！俺の紹介分がたった一行だと！！なんかもうちょっと説明することがあるんじゃないのか！！このクソ野郎！！」
さっきから意味分からないことを言って怒る氷道が次第にムカついてくる。
悲愴：「さっきから意味分からないこと言うな！！この、暴力団組長の息子が！！」
氷道：「っ…貴様！！よりによって言ってはいけないことをいったな！！悪いがここで死んでもらおう！！」
悲愴：「なにを言ってるか分からんが…そっちがやる気なら返り討ちにしてやるぜ！！」
ドゴッ！！←俺の顔に右ストレートが直撃する音。
ガッ！！ガッ！！←俺が地面に二回バウンドする音。
ドーン！！←壁に激突する音。

悲愴：「グッハ…つ…強い子に…会えて…」
朦朧（もうろう）とする意識の中で俺はゆっくり目を閉じ…
バシャーン！！↑バケツの水を氷道にぶちまけられる。
悲愴：「……」
氷道：「おっと、そろそろ一時間目が始まっちまう、確か場所は体育館だったよな…げっ！！やっば！！んじゃあ俺はおいとまさせてもらうぜ！！」
走ってその場を去る友を俺は心の底から恨んでいた。
悲愴：「俺も行くか。確か場所は体育館とか言っていたよな…」
水をかけられたことで意識が完全に回復した俺はゆっくりと立ち上がり…
？？？：「ちょっといいか？」
突然聞き覚えのない声が聞こえるどうやら俺を呼んでいるようだ。
悲愴：「はい、なんで…ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ！！」
振り向いた瞬間絶叫、急いで逃げようと即Uターンし逃げようとするが…
？？？：「おい、ちょっと待て！！」
だが、襟をつかまれ俺は声をかけられた人につかまってしまうしまう。
悲愴：「すいません！！すいません！！すいません！！どうか命だけはお助けを…頼む！！この私、悲愴皆無を男にしてやってください！！」
観念した俺は必至に土下座&命乞いをする。
？？？：「いや…そんなに怖がらないでくれ…」
そうは言うものの怖がるなと言うほうが無理である。なぜかって？だってかっこよくて右目には眼帯で背中に人間の背丈以上はある剣？刀？ああ！！もうどうでもいい！！とりあえずものすごく怖い、めっちゃクールなやつみたいな話し方はするので完全なクールキャラだし今にも殺すぞというオーラが背中からでてる感じがする。

悲愴：「すい…」
「すいません！！」と言おうとしたところでちょっと考える、相手は怖がるなと言っている…もしまた「すいません！！」とか言って怖がるような素振り（そぶり）を見せたら…
俺の脳内未来予想図
？？？：「さっきから怖がるなと言ってるだろ！！死ねえええ！！」
背中に背負った刀？剣？を抜き取り構え、俺にを確実に捉えてそれを振り下ろす。
悲愴；「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ！！」
ザシュ！！↑俺が真っ二つに切られる音。
俺の脳内未来予想図　完
うわああ！！駄目だ！！確実に殺される！！こうなったらなんとしても怖がってない素振り（そぶり）を見せるしかない…
悲愴：「ああ…大丈夫ちょっと驚いただけだから…」
震える声を必至に抑え平常心を装う。
？？？：「…膝…」
悲愴：「えっ？」
？？？：「膝がめっちゃ震えてるが、大丈夫なのか…？」
悲愴「…まさか、そんなこと…ない…」
下をみると尋常じゃないほど膝が…たぶん一秒間に十回は震えている。
…終わった…悲しかった俺の人生を振り返りながら、だんだん恐れていた死が受け入れられる。
？？？：「あの…」
悲愴：「ああ、俺を殺すのか。さあ早く、殺してくれ。できればなんの痛みも感じない殺し方にしてほしいな。」
？？？：「いや、殺さないから…ちょっと聞いてくれ、お前みたいに俺はたくさんの人に道を尋ねただが、お前と同じように叫んで逃

げて行った…教えてくれ！！俺はなんでそんなに怖がられるんだ？」
悲愴：「…へっ？」
自覚してないこいつはバカなのか？
悲愴：「強いて言うなら…その背中に背負っているやつがめっちゃ怖いでしゅ。」
やっべ噛んだ！！
？？？：「……ああ！！そうか！！そういえばここの人間は武装していなかったか！！すっかり忘れていた…」
悲愴：「ん？」
なにかとっても聞き逃してはいけないことを聞いてしまったような…？？？：「…恩にきる。俺の名前はカンタレラ・リネシエロ。別次元からきたんでまだ分からないことはあると思うがよろしく。」
悲愴：「ああ、こちらこそよろしく。」
……ん？今こいつ別次元から来たとか言わなかった？
リネシエロ：「…やっば…別次元から来たって言っちゃいけなかったんだった…」
……
……
悲愴：「ええ！！」
驚きのあまり声が出ず。遅れて二十秒ご遅れて絶叫する。
リネシエロ：「すまん！！今のことは聞かなかったことにしてくれ。」
両手を合わせ深く頭を下げる。
悲愴：「…はあ…別にかまわないけど…」
ここまで頼まれるといやだというわけにはいかないので俺はそう返事してしまった。

リネシエロ：「そうしてくれると助かる…そうだ！！俺と友達にならないか？そしたらお返しとかできるかもしれないしな…」
悲愴：「ああ、それくらいならお安い御用だよ」。
リネシエロが手を差し出し俺はその手をとり深い握手を交わす。
……心の中では叫んでいた、「やらかしたあああああああああああああああああああ」っと…
悲愴：「で、道案内とか言ってたけど…どこに行きたいんだ？」
そんなことは表に出さず話題を変える。
リネシエロ：「おっとそうだった、二年の教室ってどこにあるの？」
ん？二年の教室って俺たちの教室じゃないか。ここに何の用があるんだ…いやな予感がするのでとりあえず聞いてみることにする。
悲愴：「二年の教室か…そこでなにかすんの？」
あくまでも平常心である。
リネシエロ：「ああ、俺は転入生で今日からこの学校に通うことになっている。」
パタリ↑俺がそのまま地面に崩れ落ちる音。
リネシエロ：「おい、どうした悲愴！！しっかりしろ！！」
意識を失う直前俺は思った、そういえば突然出てくる転校生は、クールでかっこよくとても不思議な人でその正体は超能力者かなんとかだということを…以前そんなことにあこがれていた俺を…心の底から呪っていた。

第二話　転校生はクールでかっこいい？（後書き）

こんな感じで前より長くなってしまいましたががんばって読んでみてくださいな。
あっ！！そうそう新しく書いたクソ小説ギャグガンダムってやつがあるんで、興味のある方は読んでみてくださいな。

第三話　熱血キャラは子供向け（前書き）

ちっと遅くなりすぎましたがなんとかあがりました。
…まあ読んでるやつなんていないか…うれしいと悲しいの感情が混ざり合ってとっても複雑です。

第三話　熱血キャラは子供向け

あの転校生カンタレラ・リネシエロの紹介から始まった授業、紹介のときには刀的なものは背負っていなかったので誰も恐怖心は抱いてはいなかったかたもののこの俺悲愴皆無だけは頭を抱えて震えていたことをこのクラスで知る者はいないだろう。

んなわけで世界が注目している学校でのＡＴ乗り育成授業が始まろうとしていた。

一時間目に行われた全校集会で最初反対していた生徒たちにより学校で一学年だけがその育成授業を受けることになったらしいが残念ながらじゃんけんで二年が負けてしまったらしい…らしいとしか言えないのは無論気絶していたからである。

小泉：「え～っと自己紹介が終わったんで早速授業に入りたいんだが…残念ながら俺にＡＴ（アーマードトルーパー）を教えられるほどの知識は持っていない…なので国からＡＴ乗り育成授業を担当する講師が来ることになった。」

クラスのみんな：「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

小泉：「しかも、ガンダムを倒したあのＡＴ隊の元一員だそうだ！！」

クラスのみんな：「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

男子生徒Ａ：「ってことは、あの超かっこいいって噂の日本唯一のＡＴ乗り！！」

男子生徒Ｄ：「まじかよ！！テレビの取材を全部断っていて顔を知る者はほとんどいないというあの人に会えるの！！」

女子生徒Ａ：「ああ、色紙とサインペン用意しなくちゃ。」

女子生徒Ｃ：「私も私も！！」

男子生徒Ｂ：「俺はそのついでに握手してもらうぜ。」

あんなに命がどうたらこうたらとかで戦いたくないとかで争っていた人たちの変わりようがすごいような気がする…確かＡＴ乗りの給料がひと月３００万円って聞いたら飛びあがって喜んでたらしいからな…みんな生活に苦労してるんだな、うん。
小泉：「まあまあ、そう慌てるんじゃない…じゃあ講師入ってください。」
ワクワク　ワクワク
生徒の大半が机から身を乗り出していつでも突撃できる体制となる。
ガラガラガラ！！
ドアが開いて…そして…
？？？：「やあみんな、待たせたな！！」
３０代くらいのメガネをかけた天然パーマの男がドヤ顔で立っていた。
クラスのみんな：「……ん？」
小泉：「ええ…改めて紹介しよう…西織高氏（にしおりたかうじ）この人はガンダムを倒したあのＡＴ隊の幻の６人目と呼ばれている。役立たず…じゃなかった伝説のＡＴ乗りだ…」
西織：「今役立たずって言おうとしたよね？違うよ！！ちゃんと出撃までしたんだよ…その後がれきで機体が躓（つまず）いて壊れちゃって…それで修理してたら…なんか残りの５機がガンダムを倒しちゃって…え～その…なんだ…まあ、とりあえず俺は役立たずってことじゃない！！」
クラスのみんな：「……」
全員が机にきちんと座りなおして真っすぐ西木を見る。
小泉：「まあ、そういうことだ…講師なにか一言お願いします。」
西織：「うっしゃ！！この学年全員を１人前のＡＴ乗りにするためにやってきた西木崇だ！！
これから様々な厳しい訓練が君たちを待っているが！！君たちならきっと乗り越えられる！！もし泣きたいときがあったらその時は俺

の胸で泣け！！以上！！」
小泉：「…うわあ、キモ…じゃなかったものすごく暑い一言ありがとうございます講師。」
西織：「暑い？熱いじゃないの？しかもキモって…」
小泉：「じゃあ西木講師に質問がある人、手を挙げて！！」
西織：「無視すんな！！」
氷道：「はい…」
総理と意味不明の西木講師のコントが行われている中で俺の親友こと氷道連麻が手を挙げる。
小泉：「んじゃ氷道。」
氷道はゆっくり立ち上がる。
西織：「おお遠慮せずになんでも聞いてくれいいぜ。」
氷道：「こんな講師の言うことを聞きたくないんですけど、どうすればいいですか？」
西織：「このガキが！！言っていいことと悪いことがあるのを知って…」
小泉：「そうだぞ氷道！！今は質問タイムで相談タイムじゃない！！そういうことは次に行われる罵声タイムの時なら言ってもいいぞ！！」
西織：「フォローになってないよ！！なんだよ罵声タイムって！いつ行われ…」
男子生徒Ａ・Ｂ・Ｃ：「はい！！」
先生たちを３人の息ぴったりのボケでからかうことから黒い３連星と呼ばれ教師に恐れられている男子生徒Ａ・Ｂ・Ｃがほぼ同時に手をあげる。
小泉：「おお黒い３連星！！こいつに一発なんか言ってやれ！！」
西織：「教育者の言うセリフじゃない！！」
ん、よく見ればあんなにいじられてるのになぜあの講師は笑顔なんだ…少し考えたがすぐ考えるのをやめた。
男子生徒Ａ：「西織ではなくモジャメガネ＋ドＭ変態野郎講師…と

呼んでもいいですか？」
西織：「そんなお〇ス〇にでてくるメガネと同じにしないでほしい…西木講師と呼んで…」
男子生徒Ｂ：「じゃあ僕はクソメガネ＋超ドＭ変態さんって呼びます。」
西織：「私はドＭでも超ドＭでもないから、素直に西木講師と呼べば…」
男子生徒Ｃ：「もうめんどいんでクズって呼びます。」
西織：「もういやだあああああああああああああああ！！」
泣きながら入ってきた扉を突き破り教室から全力で逃げようとするが総理（小泉先生）が慌てて西…モジャメガネを取り押さえる。
小泉：「モジャ・クソメガネ＋超ドＭ変態野郎そしてクズさん講師まだ授業にも入っていないのにどこに行くんですか？」
西織：「いやだ！！もうこんなクラスにＡＴ乗りの授業なんてできないよ～！！」
だだをこね必死になって小泉を振り払おうとするモジャメガネは…これ以上は想像にお任せします。
小泉：「なにを言ってるんですか？みんな超エリートのＡＴ乗りのモジャ・クソメガネ＋超ドＭ変態野郎そしてクズさん講師をかっこいいと思ってるのに素直にそれが言えなくてついつい悪口を言ってしまうだけなんですよ！！」
西織：「ん？」
講師は急におとなしくなりゆっくりと振り向く。
西織：「…そうなのか？」
小泉：「そうですよ。本当はみんな超エリートのモジャ・クズメガネ＋超ドＭ変態野郎そしてクズさん講師のことが好きなんですよ。」
西織：「……それぐらい当然のことじゃないか！！」
急に元気になった講師は教台に立つ。
とりあえずこの講師は単純ですっごくバカだということが判明し俺は何となく教室を見渡してみる。

悲愴：「ん？」
俺の生まれつきの不幸により最悪の隣の席になってしまった転校生のカンタレラ・リネシエロがとても真剣な表情であの講師を見ていた。
その目は呆れてものも言えないほかの生徒とは違う…まるで警戒しているかのような目をあの講師に向けているような…
そこで俺は考えるのをやめる、無駄になにかを考えるのは自分の悪い癖だということは身をもって知っているので視線をあの講師に戻す。
西織：「やっぱりもうやだあああ！！」
小泉：「落ち着いてくださいモジャ・クズメガネ＋超ドＭ変態野郎そしてクズさん講師！！」
西織：「もうその呼び方はやめてくれ！！」
この講師とはとても仲良くなれそうな感じが…ん？
誰かの視線を感じた俺は再び周りを見渡すがみんなあの講師を見て大笑いしている…
気のせいのようなので今度は窓から外の景色を眺めると澄みきった青空の下を車や人が行きかい運動場で陸上かなにかをやっているのか５０メートル走をしている生徒がいる学校ならではのいつもの景色が広がっていた。

第三話　熱血キャラは子供向け（後書き）

やっべまた次の話考えなくては…なんか…

第四話　運命は必然…とか言うらしいよ？（前書き）

西織：俺の名前は結局西木なのかそれとも西織のどっちなんだ？
男子生徒Ａ：いいえ、先生はクズです。
西織：殴ってもいい？

第四話　運命は必然…とか言うらしいよ？

そしてあの西織ならぬクズ講師は結局教室を飛び出してしまったために世界の注目するＡＴ乗りの授業は次の日に持ちこされ人生初の二時間授業を体験した二年生一同はどこかに遊びに行っている中この俺悲愴皆無はというと…

悲愴：「はあ～…いい湯だった…」

学生寮の中浴場を勝手に使い自分の家のボロアパートの帰り道を歩いていた。

悲愴：「うちのアパートには風呂がないからいつも帰りにここを勝手に使うんだが…」

帰りが早すぎて何もやることがなく、金も余裕はないのでまっすぐ家に帰るってのも結構悲しいもので…

ドカ！！

いつものお約束なのか車にひかれ俺は宙に舞いながら地面に落ちる。

悲愴：「うぐっ…」

いつもだがめちゃくちゃ痛い…体のところどころ痛いところはあるがいつものように腕の骨を一本持っていかれたいつもの感覚がする。

悲愴：「そしていつものように車はどこかに逃げると…」

まったくもって運が悪すぎるがこんなことに慣れすぎた俺にとってこんなことどうということはない…ほらもう痛みが引いてきた。

車にひかれて倒れていた人間がパッと起き上がり帰り道を歩く。

？？？：「おいそこのお前！！」

悲愴：「ふへ？」

本日の二度目となる聞き覚えのない声に呼びとめられた俺はうしろを振り返ると、そこには…

悲愴：「秋葉原はここじゃないですよ？」

？？？：「初対面の人にたいしてそれはないぞ…」

猫耳＋尻尾のフル装備に髪の色が赤色のコスプレさん、俺と同い年

くらいの少女を見ればそんなことを口走ってもおかしくはないと思う。
???：「そんなことはどうでもいい！！お前今車にひかれたようだが大丈夫なのか？」
悲愴：「へっ？…ん？…えっ！？」
???：「いや…当たり前のことを聞いたはずなんだがなんでそんなに困惑すんの？」
急に申し訳ないが実は俺がいつも車にひかれてるということを知る人物は親友の氷道と小学生のころの俺を知る人しかいない。
考えてみれば意外と簡単、車にひかれたら普通は周りの人がすぐに駆けつけ救急車と警察を呼ぶ光景が浮かぶだろう…そう、高校に入ってから俺が引かれるときはきまって周囲にひとがいない…なのでだれもそんな心配をして声をかけることをするようなやつはいないのである。
???：「あの…お～い聞いてる。よくわかんないけど泣き目になるのはやめて…」
悲愴：「えっ…ああごめんよ。大丈夫腕の骨が折れてるけどこんなの寝たら治るし…こんなことは日常茶飯事だしね。」
しまった、うれしすぎて泣いてしまうところだった。
???：「ん？日常茶飯事？…ってことは毎日あんな風に車にひかれてるのか？」
悲愴：「まあね、他にも信号はきまって赤だったり、天気予報は悪いほうに外れちゃうし、
三日に一度は財布を落としたりあとは…」
???：「いや、もうこれ以上言わなくて結構だ…その代わりに名前を教えてくれないか？」
悲愴：「えっ！？いや…別に名乗るほどの者では…」
???：「いいから言え…」
悲愴：「悲愴皆無です…」
殺気をだしてまで聞くことじゃないと思う…

？？？：「う～ん…」
猫耳少女は何かを考え始め時々唸り声をあげる。
それを眺める俺はふと思う…猫耳＋尻尾のフル装備ってこんなかわいいもんだったか？…いや違うあの少女にあのフル装備がものすごく似合っているからああ見えるのか…今度氷道に猫少女計の画像売ってもらうか…
？？？：「よし！きめたぞ！！」
なにかを決心したらしい少女がこちらに歩み寄る。
悲愴：「あの、なんでしょう…」
「なんでしょうか？」と尋ねようと思ったその時…
？？？：「魔界帝国一代目魔王のアビス・Ｆ・ルシフェルが宣言する。悲愴皆無！！今日からお前が魔界帝国二代目魔王だ！！」
…………………………………………………………
…………………………………………………………
…………………………………………………………
…………………………………………………………
…………………………………………………………
…………………………………………………………
…………………………………………………………
……………………………………………
悲愴：「ここは三次元ですよ？」
アビス：「知ってるんだが…」
…が続く行が今日だけで二回でてくるとは思わなかった。
悲愴：「いい精神科の医者を知ってるんで今すぐ紹介してあげますから…」
アビス：「いや…精神のほうは正常だが…」
悲愴：「大丈夫ですよ。値段はお手頃だし先生は優しいですから」
アビス：「人の話を聞けや！！」
悲愴：「ぎゃふん！！」
脱力系の叫びをあげてしまう。
アビス：「私を二次元と三次元の区別もつかない廃人と同じにする

な私は本当に魔界帝国一代目の魔王で魔界を支配していたんだぞ！！」
悲愴：「そんなことを急に言われても信じられるわけがないじゃないか！！」
もっともな話である。
アビス：「ああ、もういい！！もう決まったから早速…」
となにか言いかけたところで…
ズドーン！！パラパラパラ…
空から人が降ってきた衝撃で着地点のコンクリートの道路がへこんで穴があいた。
？？？：「あ痛たた…ちょっと勢いつけすぎたかな…」
そう言い足をさするまたもや俺より年下と思われる少女がいた。
悲愴：「ここってホントに三次元なのか？」
自分の世界がよくわからなくなってしまう。
アビス：「さあ？私に聞かれてもな…？」
隣のアビスと名乗った自称魔王までもが曖昧な返事をする。
アビス：「今失礼なこと考えなかった？」
悲愴：「とと…とんでもない！！」
なぜ分かった！！
？？？：「ん？…あっ！！」
その少女が俺を見て突然声を上げる…俺の顔になにかついているのか？いやそれとも見ていられないほど自分が不細工なのか？…でも、顔だけは並より上くらいって言われるし…
？？？：「悲愴皆無…」
悲愴：「へっ？」
な…なぜ俺の名…あ、俺の名前はこの辺じゃ有名だったのをすっかり忘れていた。
？？？：「悲愴皆無さん…ですか？」
ちくしょ～！！有名なのは名前だけかよ！！…だが、返事をしないわけにはいかない…

悲愴：「園十里弟素（その通りです）。」
アビス：「活字でしか分からんギャグをするな…」
魔王にツッコミをされてしまった。
？？？：「やっぱり…写真と全く同じ顔をしているし…これで間違いはなさそう…」
なにか言ったらしいが全く聞き取れなかった。
悲愴：「あの…なん…」
？？？：「兄さん！！」
そしていきなり俺の胸に飛びついてきた
？？？：「♪～」
その少女はどうやらうれしそうだが…全く状況が飲み込めない…ていうか今日はちょっとそんなことが多くないか？別次元からきたというカンタレラ・リネシエロ…魔王らしいアビス・Ｆ・ルシフェルというコスプレ少女に二代目の魔王に任命されたらしいし…そして最後には俺を兄さんと呼ぶ…ん？ってことは俺に妹がいた！？ああ…考えるだけで頭が痛くなる…が！！
悲愴：「今の状況は最高だな…」
心の底からそう思ってしま…
ジャキン！！
鉄でできたなにかがなにかにこすれあう音…そう、まるで刀をさやから抜き取る感じの音で…
？？？：「！！伏せて！！」
シュン…という風を裂く音がし俺の頭があった地点に刀が横に薙ぎ払うような形で振られていて少女に引っ張られなければ俺は確実に死んでいたという状況にいつの間にかたたされていた。
？？？：「ちっ！！」
フードで顔を覆っているために顔はよく分からないがおそらく男だと思われるそいつは再び刀を構え俺に振り下ろそうとする。
悲愴：「いやあああああ！！死ぬ死ぬ死ぬ死む！！殺される～！！」
なんとか男から見てひだりの方向に転がりなんとかそれをかわすが

完全に体制が崩れその場にうつ伏せになってしまう。
???：「これで！！」
その隙を逃すはずもなく、その男は刀を再び俺に振り下ろす。
悲愴：「ちくしょお！！俺の不幸はここまで悪化するなんてええええ！！」
死を覚悟した俺は強く目を閉じる、これから必ずくる激痛に備えるために…が、
ガキン
振り下ろされる刀をなにかが受け止めたいい音がして俺は反射的に目をあける。
するとそこには周りがオレンジの光を放つサーベルを持った少女が男の刀を受け止めている姿があった。
???：「よく分かりませんが兄を殺そうとするのならこの私、地球防衛企業遊撃課一番隊の悲愴奏（ひそうかなで）がとめてみせます。」
周りがオレンジ色の光を放つサーベルを受け止めている刀が徐々に赤くなり溶けて刀が曲がりそれを少女が切り裂き武器を無効化する。
それを察知していた男は刀を即座に捨てて後ろに下がり間合いを取る。
???：「くっ…邪魔がはいるのは厄介だな…」
そう言うと男は地面に何かを投げ付ける、するとそこからたちまち煙が起こり周りが見えなくなる。
奏：「逃がすもんですか！！」
逃がすまいと追撃をはかろうとする。
アビス：「待て！！」
それを見たアビスが奏の手をとる。
奏：「離してください、でないとあなたを…」
アビス：「無闇に突っ込むのはリスクが高すぎる、深追いはしないほうがいい。」
奏：「うっ…」
アビスの言ってることが正しいと判断した奏はそれ以上男を追うこ

とはない、白い煙でふさがっていた視回がもどるがやはり男の姿は見当たらなかった。
アビス：「あの男…けっこうやる奴かもしれんな…」
奏：「あの戦いを見てなにひとつ取り乱していないあなたのほうがかなりできるほうだと思いますが？」
アビス：「当たり前だろ、なんせ私は魔界帝国一代目の魔王アビス・F・ルシフェルだからな。」
仁王立ち＋ドヤ顔で自慢する。
奏：「えっ、魔王！？」
やはりそれを聞いて驚かない人間はいないらしい。
悲愴：「た…助かった…」
パタム
奏：「まあ、こんな風に襲われたら普通こうなりますからね…」
アビス：「全く、二代目の道はまだまだ遠いな。」
現在時刻は１１時３０分、まだ一日の半分もすぎてないのに衝撃の連続である…
はあ～運命は必然…とかいう言葉を今だけ信じてやろう。

第四話　運命は必然…とか言うらしいよ？（後書き）

ＳＤガンダム　ガシャポンウォーズが熱い！！

古くてすんません…

第五話　チョコボールで「本当にあるのか？」と思うくらい当たらない金のエ

アスハム・ブルダーって誰だっけ？

第五話　チョコボールで「本当にあるのか？」と思うくらい当たらない金のエン

悲愴：「…ん？」
景色がぼやけて見える、どうやら俺は寝ていたようだ…なんか嫌な意味で気絶した思い出があるが…まさか！！
悲愴：「夢！！今までの全部夢だったのか！！」
奏：「あっ、起きたんですね兄さん。」
アビス：「全くあのくらいで気絶するとはな…目も向けられないぞ。」
悲愴：「……」
どうやら夢ではなかったようだ…
アビス：「お～い…あからさまにがっかりするのはやめてくれ。」
？？？：「チョコ！！モドチョコモッド！！」
ん？なにか聞き覚えのない声が…見てみると…
悲愴：「ぎゃあああああああああああああお化けお化けお化け！！」
アビス：「うるせえ！！」
ちゃぶ台を叩いて怒鳴るコスプレ少女。
悲愴：「がはっっ！！」
おかしな叫び声をあげ即正座する俺。
奏：「兄さん…意味不明な叫び声になってますよ…」
それは俺の心の中で言ってるから言わなくていいんだよ、自称俺の妹よ…
アビス：「こいつは魔王に忠実に従う悪魔のチョコボールモドキ…略してチョコモドだ。」
チョコモド：「チョッコ！！」
ちゃぶ台の上におかしな生き物が立っていた。口で説明するのがめんどくさいので料理本風に説明しよう。みんな、紙とペンを持つんだ。

1、　まず、逆J的なものを書いて…
やっぱこれもめんどいので俺が今描いてあげよう。
うん、これは…
アビス：「うわ…下手だな。」
悲愴：「仕方ないじゃん。パソコンで二十五秒くらいで描いたやつなんだから」
奏：「兄さんリアルな話はやめてください…」
本当のことを書くのはそこまでにしておこう。
アビス：「このチョコモドはお前をこのアパートまで運んでくれたんだぞ！！礼の一つくらいはないのか！！」
悲愴：「感謝します。監督…」
チョコモド：「チョコチョッコ」
アビス：「お前たちはいったいどこの高校の野球チームだよ？」
悲愴：「違うぞ自称魔王少女、高校の野球チームじゃなくて柏レイソルなんだぞ！！」
チョコモド：「チョッコチコ」
アビス：「次自称とか言った日には貴様の命はないぞ？」
悲愴：「あっ、意外と疑問形だ。」
奏：「どんな意味があって言っているかが分からないのですが…」
悲愴：「ふん、まだまだ修行がたらんな自称俺の妹。」
奏：「スクラップになりたいんですか？」
悲愴：「ごめんなさい…」
俺の土下座により俺は二人と一匹に敗北してしまった…というかそのうちの一匹って最初俺の味方だったような気がするようなしないような…まあいいか。
悲愴：「それでじしょ…」
ギロ！！×2
悲愴：「…じゃなくて魔王様、今は何時でございますか」
ふう～危うくたった五話で小説が最終回を迎えそうになった毳（ぜい）
アビス＆奏：「「五時三十二分…」」

バシューン　俺はうまく逃げだした。
アビス：「逃げるな悲愴！！これから二人の紹介の詳細に入るところなんだぞ！！」
奏：「そうですよ兄さん！！泊ってください」
悲愴：「泊ってくださいじゃなくて止まってくださいなんだけど！！」
追いかける二人を無視して全力で走る。どうやら俺はまたもや不幸な目にあっているらしい、しかもこんなに大きな不幸が続いたのは初めてである。もしかするとこのまま俺は死んでしまうのかもしれない…仕方がない前々から考えていたあの作戦を実行する日がやってきたようだ。
そして十分後
悲愴：「ふい～あの二人やっとあきらめたのか。」
毎日生徒に追われてきた俺をそう易々（やすやす）とつかまるられるわけがないのである。
悲愴：「んじゃ早速行ってみ…」
チョコモド：「チョッコ！！」
悲愴：「んじゃめな！！」
あのじしょ…じゃなくて魔王様がつれてきたという変な生物チョコボールモドキ略してチョコモドが俺の肩に飛び移ってきたのだ。
悲愴：「驚いたな…まさか俺の速さについてこれるなんて…すごいなお前。」
チョコモド：「チョッココココ」
チョコモドは自分の胸を強くたたいた、おそらくえっへんと言っているのだろう。
悲愴：「んまあ、細かいことは気にしないでとりあえずついてくるのなら覚悟するんだな…俺が行くところは少々厄介だぞ。」
移動中
悲愴：「はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…ぜい…ぜい…ぜい…」
１０００段以上もあったのではないかと思われる階段を上り俺はそ

の場に崩れ落ちていた。
チョコモド：「チョッコ、チョッコ！！」
悲愴：「くっ…俺の肩にはあ…ずっと乗ってはあ…るんだからはあ…苦労するのはあ…は俺だけだった…」
少し考えれば分かることだっただけに妙に悔しい、人間生きていれば一度は体験することだと私は思う…
悲愴：「まあ…」
そう言うとやっとの思いで起き上がる目の前には大きな鳥居そしてさらに奥に大きな建物がそびえたっていた…そうここは…
チョコモド：「チョコチ」
悲愴：「すまん…なんて言ってるか全然分からん。」
…神社である。

第五話　チョコボールで「本当にあるのか？」と思うくらい当たらない金のエン

ん？あれ挿絵ってどうやって貼り付けるんだ？

第六話　ＰＳＰ　ｇｏ　はＳＯＮＹ最高の駄作だと思う人はけっこういると思う

遅くなりましたがあけましておめでとうございます。
装甲騎兵ボトムズの新シリーズはでるなど今年はいいことがたくさんありそうでとても楽しみです。
あと投稿遅くなってすんません＞（＿　＿）＜

第六話　ＰＳＰ　ｇｏ　はＳＯＮＹ最高の駄作だと思う人はけっこういると思う

これまでのあらすじとかその他もろもろ
悲しい男悲愴皆無がいました。いろいろあって神社にいます。
終わり
悲愴：「短いなおい！！」
チョコモド：「うわっつ！！いきなりどうかしたのか？」
悲愴：「あっすまんすまん、なんでもないんだ。」
あえてチョコモドには事情を話さなかった…って
悲愴：「ねえチョコモドくん、いつからあのかわいいしゃべり方じゃなくなったの？」
チョコモド：「第六話の五行目からだけど」
悲愴：「いや、冷静にかえされたら俺が困るんですが…」
「前のほうがよかった」…とは口が裂けても言えないような気がした。
チョコモド：「いや～いろいろあってやっと日本語のインストールが終わったんだよ。」
悲愴：「あなたはパーソナルコンピューターですか？」
ちょっと尋ねたくなった。
チョコモド：「いいえ私はパソコンではありません。チョコレートモドキ、略してチョコモドです。」
悲愴：「あっなるほど、よく分かりました…」
ツッコミどころはたくさんあったが一番言いたいと思ったのは…チョコモドの意味だと思ったが…それも決して言ってはいけない理由は実はよく分からなかったりなんだったり…
チョコモド：「とりあえず鳥居の前で立ち往生するのはどうなのよ？」
悲愴：「よくないのよ。」
チョコモド：「んじゃ早く行こうよ。」

悲愴：「小説だから言っておくけどさ、お前手のひらサイズなんだぞ。」
チョコモド：「……」
無視された！！絶対認めたくないんだこいつ！！…まあ人？が気にしていることを言うのはあまり良くない、早速中に入ってみる…結構な大きさの神社で昔はテレビが取材するほどの有名な神社なのだが人は全くいない、理由は考えると実は簡単俺でも分かることだ。
若者の割合が９０％近い日本、なにがうれしくて神社に来る若者がいるのか…と考えれば誰でも納得がいくことだろう。
そう、神社によく来るご老人その他もろもろの人たちは残念ながら激減してしまったし、神社の跡継ぎも現在はほとんどおらずそういうところはほとんど廃墟と化してしまったのだ。
チョコモド：「見えない神を信じるなんて今の若い輩（やから）には難しい話だ。」
悲愴：「そうだな……お前俺の心が読めたりするの？」
チョコモド：「えっ、うん魔王の契約をしたからこのチョコモドくんは悲愴皆無正式二代目魔王の心が読めるようになったのです。」
悲愴：「へえ～」
……ふへ？
悲愴：「なあちょっと待て、魔王の契約って何？俺二代目魔王確定？ていうか魔界って本当にあるの！？俺もしかして明日死ぬ！！」
チョコモド：「少し落ち着きましょうよ魔王様、そんないっぺんに聞かれたらちゃんと答えられませんよ。」
悲愴：「ノヴァアアア！！呼び方が魔王様になってるうううう！！魔王の契約って何！！」
チョコモド：「叫んだあとにしっかり質問の答えをかえしているって微妙にすごいかもしれん…分かった説明するから…そしてノヴァアアアア！！」
…ノヴァアアアアア！！という叫び声が結構気に入りました。
ノヴァ　意味：光り輝き続ける星のこと。

悲愴：「解説はいらんぞ！！」
うる覚えなのでノヴァの意味はｙａｈｏｏ辞書かなんかで調べてください。
チョコモド：「えっと…まず魔王の契約なんですが魔王には…なんて言ったらいいかな…ＲＰＧとかにありがちな闇属性の力とか魔力とかのなんか黒い波道弾を出せるみたいなやつがあるじゃないですか。」
悲愴：「まあＲＰＧでは確かにそういうありがちなのがあるぞ…あともうちょい池上彰風に解説できない？」←無茶ぶり
チョコモド：「そんな力を実は初代魔王様のアビス・Ｆ・ルシフェルにはあったりするんですよ…池上彰っぽいですか？」
悲愴：「どこが池上彰ぽかったのかがよくわかんないけどさ、魔王に様はつけてアビス・Ｆ・ルシフェルには様をつけないのは少し失礼じゃないのか？次は羽鳥アナ風の解説の仕方で」
チョコモド：「それは…あの人とは幼馴染の腐れ縁ですからついよびすてにしてしまったりしなかったり…とりあえず魔王様はとてもめんどくさいな。」
少し恥ずかしそうなチョコモドである。
悲愴：「……お前とあの魔王…じゃ俺になるから…元魔王とじゃあ絶対に釣り合わない以前に人間でもなければ哺乳類でもないよな？」
チョコモド：「失礼な！一応哺乳類の一種だ！！というかなんでそんなことを聞く？」
悲愴：「えっ、だって幼馴染ってギャルゲーで一番最後に攻略するお楽しみのパターンそして一番人気になりやすいあれだよ。だから元魔王とはそんな関係に…」
チョコモド：「なぜギャルゲーの常識のために彼女を確定される…そんな関係じゃないから」
悲愴：「そう言って一ヶ月後には実は付き合っていましたってパターンはだいたいどんなゲーム会社もつかってるぞ！！」

チョコモド：「いい加減にしてくれ！！お前たちのギャルゲーの常識を現実の俺とおなじにしないでくれよ。」
悲愴：「あっ、ごめんよもしかしてエロゲーのほうだった…すまんエロゲーは年齢制限とかの関係とかでまだ一度もやってないんだ…」
チョコモド：「そういう意味じゃなあああああいいいいいいいい！！」
誰もいない神社から叫び声が鳴り響いたというフレーズは本当にあった怖い話とかでありそうだな…なんて考える自分がそこにいた。
三十分後…
悲愴：「分かった、つまりお前とあの元魔王様とは友達以上恋人未満の幼馴染という関係なんだな。」
チョコモド：「さっきからずっとそう言ってるんだよ！あ～疲れた…」
俺の肩にチョコモドは崩れ落ち…
チョコモド：「ＺＺＺ…」
悲愴：「寝たときの表現といえばやっぱりＺＺＺだな。」
言っておくがトリプルゼータという意味じゃないぞ！！
まあそれはいいとして俺はここにお参りに来たわけではなかったりする。
だいたい神に頼んでこの不幸が何とかなるのならば俺は絶対にもうハッピーエンドの起承転結で言う転のところまではいっているだろうし実は作者も二週間後に受験で勉強を全くやっていないそして福岡に住んでいるというのに太宰府天満宮にも行かなかったのは自慢したいポイントである。
そう、目的はただ一つ！！
悲愴：「本殿の隣にある口を清めるとかなんかをする水飲み場の水をペットボトルに入れることだ！！」
んなわけで…1時間後
悲愴：「まあ、これくらいあったらどうにかなるだろう。」
学生鞄に一・五リットル入るペットボトル（そこらへんで拾った）

を入るだけ詰め込んだところで立ち上がる。
悲愴：「また水道を止められたんだ…すまんこれも生き残るためだ許してくれ。」
なんか言っとかないと罪悪感が残りそうなので本殿に頭を下げながら一応謝っておく
悲愴：「よし、帰ろう！！…地獄をみれば～心が…」
？？？：「ちょっと待ちなさいよ！！」
悲愴：「ヘルアンドヘブウウウン！！」
驚きの声とともに俺はその場に倒れてしまった。
？？？：「なんて叫び方してんのよ、おもいっきりガオガイガーの初代必殺技の名前じゃないの・・・」
悲愴：「えっ！！もしかしてゴルディオオオオン！！のほうがよかったりします？」
？？？：「それじゃあ必殺技じゃなくて機体の名前になるわよね、せめてハンマーを入れてあげたらどうよ？」
悲愴：「ああ、なるほどそれじゃあ次からはゴルディオオオオオオオンハンマアアアアアアア！！ってがんばって叫んでみます。」
？？？：「そう、がんばりなさいよね…ってちがあああああう！！」
何とか会話は出来てるものの実話バックが顔にめり込んでいて相手の顔が見えていなかったりする。　相手はどうも女子らしいのだがかわいくない現実の少女に興味は…ない！！
…とまでは言わないがまあ二次元にどっぷりはまりすぎてしまったために現実がこの通り嫌いになってしまったのである。現在作者は輪廻のラングランジェを見ています。
？？？：「だいたいあんたは何やってんのよ！！私の神社の神聖な水を大量に持ち帰ろうとするだなんてどうかしてるわよ！！」
あれ？なんだろう初めて聞く声…初めて会う人のはずなのになぜか親近感というかなんかそんな感じが…
？？？：「ちゃんと聞いてんの！？ほらいつまで倒れてんのよもう！！」

無理やり手をひかれ立ち上がる。そうすると自然に顔にめり込んでいた鞄が顔から離れて…

悲愴：「いやあ……………………………………………………………………………」

目の前には…現実にはいるはずのない少女がそこに立っていた。

？？？：「全くあんたみたいなやつがいるから神社管理はめんどくさいのよ…ちょっときいてんの！！」

間違いない明らかにツンデレっぽいつり目にピンクの髪のツインテール…そんな二次元ぽい人物なのにコスプレではない…なんというか本当に二次元から飛び出たみたいな…

悲愴：「あああああああああああああああああああああああああああああアアッグ！！！」

そうか…そういうことだったのか…どうりでおかしいと思ったよ、次元連結震やらガンダムとかアマードトルーパー白虹高校（びゃっここうこう）なんていうありもしないような名前の学校に通う、さらには一日で学校がAT乗り育成授業をすることになりかわいそうな先生が転任してきて魔王が登場して二代目魔王に任命され空から突如現れた少女は実は妹で謎の男に命を狙われ変な生き物チョコモドがでてきてそして…

悲愴：「ガンダムエースでやってるMSGの明貴美加さんの描くあのピンクのツインテールの少女だとおおお！！」

俺はここで確信した。

この世界は三次元ではない、どうやら俺の生きてる世界は…二次元らしい。

第六話　ＰＳＰ　ｇｏ　はＳＯＮＹ最高の駄作だと思う人はけっこういると思う

小説でも書きましたが輪廻のラングランジェル？でしたっけ…それを見たんですが蒼穹のファフナーっぽいような印象でした。
ついでに今年初めて作ったガンプラは少々古い１００分の１のアルトロンガンダムです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8642y/

GENTS　THE　WORLD

2012年1月11日02時53分発行